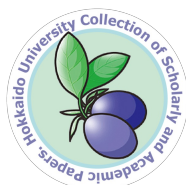




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	國民社會についてN02
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Description	『鈴木栄太郎著作集 7 (国民社会学原理ノート)』を出版した際のソースとなった原稿である (同書内での言及による)。
Issue Date	1964-07-07
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77449
Type	manuscript
File Information	I042_01N02S38.pdf



清源車庫 11

38

2-2

NOTE BOOK

CONTAINING BEST RULED FOOLSCAP

國民社會について

No. 2

38.11.12.



意匠登録 No.151492 2-2



目次

一 前文より

二 人同国係としての口宗政策より
集同国係の口宗政策へ

三 コントの内外に思ふ

四 土地と操縦

五 現代口宗の概略

六 現代口宗統治用具の主要物件

七 口宗作務の仕方

八 コミュニティーと地域性

九 近代口宗の変遷

十 要する所

コミュニティーと地域性

一

六

七

一八

二〇

二二

二三

二五

二七

二八

金條河合は大作自由給自足出来、範域で
その中、分業が白か出来、階級が構成
さつといふが懸線である。今日の朝
鮮は北は石炭や工業品を生産する
が食料は乏しい。南は食料は多いが石
炭や工業品はない。両方が作となつて
分業の組織をして、互に物は交換が保た
れたか、今では南北別々といふよりも苦
しいといふ。二つの国家をなしてゐるが、
である。金條河合の上は形成されて、口
家は望みし口家がである。けれども
今日の口家は、この望みし形が保たれ
ていない場合が現にあり、これが主

スルを得る。

その生活のゆゑに

口家はそれによつて人々が形成せしむる限

りなかり、口家と住民の結着を

失つてはなして老えしゆあるかある。

口家はその口民の老を福とせしむるも

けすしと結着して老えしゆあるかある。

口家は自分のためとせしむるも

要するは他の民族、口民が統治せしむる場合がある。

その住民が速く被支配者となる場合もある。

口家は支配者が被支配者となる。

するゆゑの道は異つてあつて、誰か誰かに

も用やうの出来と統制の爲め果て

あつた。この果てには武力を思ひあつ

て、操作し得る押しおろしが附随してゐる。

口内設置せしむる武力は其の口内おけし
最優秀の武力であることは定まつてゐる。

口家は其の臣民が継承の為に構成して
 いるに於て、^{それは}其の臣民が
 人が其の臣民を統治するに
 係り、^{それは}其の臣民が
 其の臣民が其の臣民を統治するに
 係り、^{それは}其の臣民が
 其の臣民が其の臣民を統治するに
 係り、^{それは}其の臣民が

④ 階級をその中最低の地位に
立てて理解するなり、最低の位
置に金銭のみに由る富者の地位の
構成要素と見なすは如何なる
イデオロギイか

又最も賤賤者の身になつて
若しなう出けりるも若し
賤しい職業を金銭の爲に
要する後利として認めよ
所謂金銭主義者の主張を
云ひはなす勇氣は出なうか
總て富者の地位より第五の

身になり、^⑤ 植民地の不平等の身になり
て居るなり、^⑥ 口宗は統治の利器で
ある事は然りと見做さうと云ふのは
誰か疑ひでも用さうと統治用具が
口宗である。

統治の手段から理解するならば口宗は
その国民のめとか平和の度とか人格の
完成のめとか、道徳的理想實現のめとか
そんな事ばかりはなかつた筈である。^⑦
此等なるより我々には則して警告して来
たが在りても口宗は其の国民のめとか平
和のめとかある事だ。甘い見方である。實際
的でないからである。^⑧

御近く望し、石五の位地の安泰
を念じつ、考えたり家持を
春日犯した誤謬は申しや、事の
の最高の位より考えて来たこと
にある。地位や役割がは
それ等の地位や役割がは
ても、その地位や役割を順當に
はすればよい、それを固守して
安泰なることには不孝の根
源がある。

人同国係としての国家理解
後集同国係としての国家理解へ
ハインズやバートやデュークなど
は人同国係としての国家理解であつた
か米口でも今も集同国係としての
国家理解に向つてあるであらう。
マクスウェルでも人同国係としての
国家理解であつた。
私は支那国係は人同国係としての
理解である。口民衆の心を
構造は集同国係としての理解せ
るを得ない。

コソツの内外に思ふ

コソツがベルギーの植民地からばなれ現住民
の独断の持。其国家がすぐと成る
たつので口連の管理下にナリに聯兵
が懸念して治安にあたらゝるたが
今ではおさまるまいといふ。

文明はやはりその住民連の間に
少しづつ成るまい。其の可成り
外部から云はは強制的に授けられ
可なりとてはな。めかれぬ。其を
以てまていつはつて行く。ばあふも
各視に水玉のあふ事はあふ。
外から見て合理的下き。とな人のわ
ク

にたつと想つてもその口の文化の成長
夜の如く何れによつて受け取れて行くと思
はるの口の人にもおのりよりけりかた
のてはたつのか。

今世是れは他の口のすに平流し
合ふ事が多き事。最も善き事によ
つてその口の人の幸福を思ふにた
てあつても助けられ助けられ方流し
我れも幸福を得る。その口の者が
主ではなく自らの便強のためその口
の改めを求めたり指導されたりす
る。常ての事にはその人の幸福の我れ
い形であつてある。

よ。い。す。の。余。は。内。外。に。あ。け。敵。に。な。か。え。の。
武。力。の。組。織。は。あ。つ。た。人。同。人。道。理。に
成。立。て。た。来。た。る。は。分。り。か。た。い。が。家。が
俄。に。他。の。と。離。れ。か。は。な。す。者。数
に。著。意。の。団。体。と。な。り。他。の。を。意
中。の。存。に。置。く。用。事。の。上。事。は。同
係。と。な。す。と。は。思。ふ。由。口。元。は。左。の。口
の。内。外。の。敵。に。あ。つ。た。向。つ。た。口。の
諸。平。安。を。維。持。す。と。す。一。種。一。種。は
ない。の。か。

ま。し。他。口。を。軍。る。基。地。の。め。は。は。要。の。め。に
新。用。する。様。な。場。合。は。自。己。内。の。口。民
と。同。族。の。生。活。様。生。活。水。準。を。考。へ

あうり
の掛け

の様な力をもつもので、収束します。すすめて
ほす。

の家は

口家の古くから考へては、力の団体、下他
口は利用するが、さけるが、少くても不割
り、然るに何時でも協力を止める。然るに協
力を止めてもやめなくとも何時でも戦者
口に互いに備えていふ。底はけの考
人に有る口は口家の名にあらはれあふた
いふとにじらふてあふた。口家のこの力
質は今もそのまゝに残つていふ。
口は物、口は口家の同族は口は口は口
多く有りつゝある。交通道路の用
果が想うべく緊要してあらうである。

他の記事は

□ 家は其の自身のもつもの下へ降り
道徳もさうくあるは平気で持つ。

ものつあつても好む。

歎 破した船が道とたふさへいさ一

校の板を停て浮き遊しといふは其の故

につかあつたは、それを押しのけても果に

おぼれんとする仲りの船長が

はたふぬり同大車がある人生活は

絶対い尊いものとして板橋と橋板をあ

すを思ひ、い。その同じ法律は口余

はその存在を危殆にたれた如いもの

我も認め、いとものへおろす。認めよう

が認めないが、口余行部のすきを決定

すゝのは器おに成力である。勝てば家

11

軍おられは賊軍とは口案の内部の

集団同の対立にえり際同の対立に

もたれねる。標榜である。

今般の対立はイギリスのクーデターの如き

が勃ぜいぬ。氏以東南アフリカ

中近東アフリカ、南アフリカを所管

経道口の多しと云ふは、多しと云ふは

革命が次々とおこる。恐らく

左の如き才力ありの力の対立が果たれぬ

思われぬ。はなはだあり。

衆は昭かに自身の身の可成りか

し、わが身を接し、い。衆がわが身を

な。わが身を接し、い。衆がわが身を

それから

のわ口に文化の高さの脚が着く。我々も

文化や合宿院を度々入れ替へてゐる。それ

の貿易好愛の脚。あつたをよく見取

のて後即すす下あつた。今

こゝで我々がなすのは口実を

の土地の住民が自らの名に形成する

と語つたものではなく、他の中紙の

中心は、^{（地球の）}と云ふところから

今我々見よう。新米やマイノリティ

が、一つの身はなつて口実を

すまなう。口実を強制する。支配組

織である。如何なる主権に属する。力

は一層した。かゝる支配者の居る。階層

13 権部も支配も強制する。のである。

やがてその生活の節制になつてくるに至る
としてより大分たかである。

支配者は自由を愛し、被治者のためにその

をすすめるのは、^{政治の}目的であるが、そのために

自身に犠牲を要する人にも余力を要し

て、^{その}自由より進んで統制

その余りも少なくなつて行くのである。

進み、^利その末端にあり、支配者より

利害をなす場合が多くなる。そこでの

政治は当然に威圧であり、探取である。

それゆゑ、その武力が、^{それ}よりいかにある

か。それは、^{その}人々を働かせる土地

は、基地として、^{その}大事である。人が

外に逃げ去る様な所慮は口外上
りの侵入に對する所慮と同様に大
きな同んで口煙が愈し荒いを授
けてある。

（即ち口家の常務から）

何時の時代にもマイノリティがブルジョア

リであるが、その身はなつては政治が政治

と云ふべきであらう。然し、その政治の正体

はよく分らない。然し、その政治の正体

は、大抵に口家の、村民の位置の

精進競争の、決定的な要素である。

其れ、その基礎として利用せしめる。大

口の族の競争が、近きと知れ、口家は

大口の村民の、争ひの、争ひの、争ひの、

争ひ

なり、これは。旧の口民の立場から
口民や政治を改め、疎外して見ねば
ならぬ立場が起つてゐる。

口民をニグサル（アはA口ルイは
口民に支配する異族の子然とあこ
り、民族解放の原へつゝ弱少民
を包圍してゐた大口が弱や民族の
人権を侵^{運知}になやまされるものもある
である。こゝでも口民統治の根本的変革
が叫びられてゐるにふつた。

漁船や漁具の俄かな差違ひ共に外海
漁業が盛んとなり、そのために増し漁業
概が盛場したのも戦後の新体制の一つ
の特色

下、ある海上での口控線は

労働の労働契約

と同一の性質である。

法的なものである。

① 分 地 主 権 土 地 権 土 地 所 有 人 と し て 人 一 人 一 人 の 権 利 は 一 つ だ け だ

土地と権利

アイヌは職業の自由、何れも自由を以て

大和民族と公認の権限は認められ

事柄ない  けれども、アイヌは、アイヌの

住民が多く、今では土地の所有者は

余り多くなく、多くは分譲して大和民族

の中にまじり、しかるに生活をしてい

てゐる。日本は、日本に、日本に、日本に

と同一の形式の生活を営み、あり、あり、あり

権利と、権利と、日本に、日本に、日本に

彼等と、彼等と、彼等と、彼等と、彼等と

を、彼等と、彼等と、彼等と、彼等と、彼等と

この人々は、深刻である、弱小民族

のうけは設備の運命といふこれは零丁
最悪であつて最良の様に思ふのと
思ひ入れ。パイノリテイルグは、
道々とのけ多分へおろす。口家
その支配者や群の青箱のためであつ
るといふ人々のためはない。
今の様い口家が地球にはつて
ほりを足履にして来た、一つの境
を出て逃げ延ぶ空地はそこには
ない。

現代日本の精神

一、愛国心、口定

(内部の力)

更なる愛国心は外に

二、口定の増大性の弱体化

(外部の力)

経済の増大性の弱体化

三、口定の増大性の弱体化

(外部の力)

口定の増大性の弱体化

(外部の力)

口定の増大性の弱体化

(外部の力)

口定の増大性の弱体化

(外部の力)

口定の増大性の弱体化

(外部の力)

口定の増大性の弱体化

(外部の力)

口定の増大性の弱体化

(外部の力)

口定の増大性の弱体化

8 7

一世は二大に分れて、あ
二大に分れて、戦争、収束する
は、現代、人々の欲するところ
より、その二大に分れて、戦争、収束する
光景を見る。二大に分れて、戦争、収束する
地球の破壊、戦争、収束する

一、一五、

21

現代口家統治用具の主要物件

一、武器

二、マスコット像

三、官傳制

四、政黨

五、議會

六、暴力団

□家族の健康

□家族の健康の維持
人の健康を維持するためには、人の健康を維持する

その何れか。

私は生れを以て、□家の存在を以てする

なり。□家は、□家の健康を以てする

なり。□家は、□家の健康を以てする

なり。□家は、□家の健康を以てする

なり。□家は、□家の健康を以てする

なり。□家は、□家の健康を以てする

なり。□家は、□家の健康を以てする

なり。□家は、□家の健康を以てする

なり。□家は、□家の健康を以てする

なり。□家は、□家の健康を以てする

23

のであう。

然し私の面前に最近しきりに作り出

されていゝ日本は甚だの同業である。

クレーマーがあつて昔々大立ち上りの政府の

要職に在る人が決まりぬ豫備が出来る

軍隊が組織されるの下に民衆を擁

えいとわさ仕立てである。

あゝか。

二和政権の器をう轄する日本は今

秋にある政府を世界の形勢と関係

して考えれば場合の表裡である。

20 [※] 共同体とは生活共同体が主で、必要に応じて

いゝものなる集団もその上に形成し得るもの、

四半に集団の幾つが累積したわけではきくらう

つづきコミュニティーである。一つの新共同体による共同も

共同体といふのは、スクールコミュニティーの如し。

生活共同体とは特別に考へる必要がある。

コミュニティーと地域性

ゴルフの会が健康増進会を作ります。

その上に家族族睦会を作ります。教育会

経済増進会。青年同好会。を累積

したもの。コミュニティーといふよりかある。これには

地域性は少しも思ひ入れない。※

昔のコミュニティーは当然に地域性を帯びてゐた。

主として地縁と血縁によつて交つてゐたから、村を

と都市における血縁の団体、血縁の団体

職業の団体、趣味の団体と交わる。性質

多岐のそれ等の集団を作った。

これでは他種職業の趣味の外主業主張の共鳴

思想を内面見の教養の一派のみの結果

散光旅行の、また団体を作つた。利便の故

21

この団体

人はお互いに何と合ひ互いの迷惑をかけさせず
かけられさせぬ団体でございまして多分おち
人は年々で自由で互いの尊重し合ひを
尊敬合ひ協力と云ふ人道を以て自由を
てあつて思ふ合ひ。知的善人のせうど
した交わりを乞ひて。それが近代インテリ
の社会観人権として。そんな人は見
知る人下もさうと交り平等で協力し合
事が出来よ。

近代日本の変質

(一) 人同国任、人同累修より軍國

同修、集國累修

目的意識の明白化、集國化なる

(三) 他日勢力の介入、支配の増大

(四) 集國対立の激増

要約内容

コミンテルンと地域性

そのコミンテルンの重視係、そのものは、地域性を
なくして、海を隔てた新地であるが、我等
意識の基盤は、なにもない、地域性、
いかにあるか、その一は、人の心、にせよ、
の統一、力、かない。

地域性、か、
何れ、力、地域性、か、
要約係、
外、人、
特有の、
期待、
ある、
少し、

我邦よく用いられる言語は地域語と云ふ
 語がある。^{二カ所} 然るに其の同族と云ふ語は沢
 さへない。コニツミヤと云ふ語の日本沢
 である。其の同族と云ふ語は新登記令
 による語に對立する。その下トイフ語の
 マインヤフトレゲセルヤフトの語に對し
 沢字と云ふ用いられている。又同族を意
 味するコニツミヤと云ふ語はアツレエーシヤに
 對立し、同ト族を意味する同族の語はア
 ツレエーシヤフトは族令の佐方に對し
 かあわれコニツミヤと云ふ場合は結合組
 織の形態に同じと云ふことである。

化して行く。時々、^{二カ所} 故にゆかりの
 語が自然にあらわれ、精神の結合
 の際、^{二カ所} 故にゆかりの語が自然にあらわれ、精神の結合

故にゆかりの語が自然にあらわれ、精神の結合

故にゆかりの語が自然にあらわれ、精神の結合

故にゆかりの語が自然にあらわれ、精神の結合

故にゆかりの語が自然にあらわれ、精神の結合

故にゆかりの語が自然にあらわれ、精神の結合

故にゆかりの語が自然にあらわれ、精神の結合

故にゆかりの語が自然にあらわれ、精神の結合

故にゆかりの語が自然にあらわれ、精神の結合

故にゆかりの語が自然にあらわれ、精神の結合

の中で、私はその先輩の「家庭環境」を
大々とした「ク」に思われ、か「家庭環境」
も大々とした「ク」である。今までの「家庭環境」
は「ク」を「思われ」。

「家庭環境」の中には、多くの「家庭環境」がある。
「家庭環境」も、一つの「家庭環境」である。多くの「家庭環境」
の中には、多くの「家庭環境」がある。多くの「家庭環境」
の中には、多くの「家庭環境」がある。多くの「家庭環境」

「家庭環境」の中には、多くの「家庭環境」がある。多くの「家庭環境」
の中には、多くの「家庭環境」がある。多くの「家庭環境」
の中には、多くの「家庭環境」がある。多くの「家庭環境」
の中には、多くの「家庭環境」がある。多くの「家庭環境」

マキ、ハ、の「家庭環境」を「思われ」。
「家庭環境」も、一つの「家庭環境」である。多くの「家庭環境」
の中には、多くの「家庭環境」がある。多くの「家庭環境」
の中には、多くの「家庭環境」がある。多くの「家庭環境」

「家庭環境」の中には、多くの「家庭環境」がある。多くの「家庭環境」
の中には、多くの「家庭環境」がある。多くの「家庭環境」
の中には、多くの「家庭環境」がある。多くの「家庭環境」
の中には、多くの「家庭環境」がある。多くの「家庭環境」

「家庭環境」の中には、多くの「家庭環境」がある。多くの「家庭環境」
の中には、多くの「家庭環境」がある。多くの「家庭環境」
の中には、多くの「家庭環境」がある。多くの「家庭環境」
の中には、多くの「家庭環境」がある。多くの「家庭環境」

とたん、部外全一の金庫係、
と名のり、おたんとおのほ、牛馬部の格にあ

[illegible]

月琉綴の老のすゝは我が邦の日本人に、やうな
お味を傳へせしめよと慕ひ、今地獄へ行

十條公卿
既せしめ
系々第七
今地
新丁
丁

サレの土地もある
ようなく
何れの間
家

口境内にある。自らの口の口境を振れおせば
あり込む口境はもうとこにもない

先日の親向をど大甲口実業社家の同

一人が申口からあちこし聯の大使館

逃げこんで申口日本ソ聯台湾政同

口境同なりなりまた米津屋のす件

あり。

当別の中口人の穴居

日本の政略

口界は縁の届の内にある

口境のすま

高野村の山中

茂地は人回の想

生活の意識化

意識的集團の政治力化

政治的好意と口説の分離

勝てば官妓に外は賊軍

世界各地に交る友のバーター

華令、口説成立

口説を土壌共同集團化

と見做し、口説をその目的

実現のための組織作り、口説

の修訂の必要

口説を共同作の上に冠する事

ち共同作、おもしろくする上に口説が

かおるよりより来るの修訂の必要

必要

家の戸締り

村の土壌

都市の城壁

口説線

口説内交

部落からの取引、村、市中、都市

部落間の交流、取手

都市の地位、役割

口説内交の最近時の激変

社会関係の解放化

共同化、大目時代、社会の激変